

傳山とは誰か——「傳山全書」への序文

本間次彦

一 「傳山とは誰か」と問うこと

ある人物の全集が、現時点で望みうる限りの細心さを伴った編集作業によって刊行に至ったとした場合、そのことは、それが、当該人物の生前になされたものであろうと死後になされたものであろうと、したがって、その人物がどの程度直接に編集に関わっていようといまいと、あるいは、新出資料がそこにどの程度含まれていようといまいと、一般的に言って、ある人物が一体誰であったのか、あるいは、現に一体誰であるのか、といった問いの困難さ(1)をいささかなりと低減させる事態の出現として期待されうるであろう。しかし、信頼に値する個人全集の刊行に伴う一般的な可能性の中には、そうした期待がときには速やかに裏切られる、という事態もまた含まれるだろう。すなわち、ある人物は一体誰なのか、という問いの困難さがむしろそこにかえって増幅され、倍加されてしまう、少なくとも、全集刊行以前の程度で、そのような問いの困難さが相変わらずそこに維持される、といった場合である。

そして、「傳山全書」全七冊の一九九一年末における一挙の刊行(2)は、まさに、こうした可能性について否応もなく

熟考することをそこに要請しているという意味で、端的な事例であると言っていていいかもしれない。というのも、信頼に値する個人全集が新たに、しかも、この場合には、当該人物の生前、さらに、死後を通じて始めて世に問われたという点からしても、今や、それらの著作を書いたとされる人物、傅山（一六〇七—一六八四）とは一体誰なのか、という問い、これまでにも繰り返して問われてきたその問いの困難さの程度について、今一度見積もり直すべき時である、と言っていていいからである。たとえ、そうした問いがこれまで既に繰り返して問われてきたために、そのように問うことが一見どれほど自明に思われようとも、今や、傅山とは誰か、と性急に問いかける前に、まずは、そのように問うことの困難さの程度を、あらかじめ見積もり直すべき時がおそらく訪れようとしているのである。

ところで、そうした再見積もりを出そうとするなら、その前提として、当然また、以下のことがあらかじめ確認されなければならぬだろう。すなわち、「傅山全書」刊行以前の段階で、あるいは、傅山の生前から現在に至るまでの間に、「傅山とは誰か」という問いは、どのように問いかけてきたのか、そして、そうした問いに常につきまとうであろう困難さは、そこにどのような刻印を残してきたのかということ、がそれである。「傅山とは誰か」と問いかけることは、これまで、どのような意味で困難であったのか。それを確認するところから作業は始められなければならない。

もっとも、おおよそその結論をあらかじめ言ってしまうなら、一見したところでは、「傅山とは誰か」と問いかけることは、これまで、ほとんど困難ではなかった、かのようなのである。というのも、「傅山とは誰か」という問いの困難さとは、そもそも、次のような点に関わるものと思われるからである。

そのようなタイプの問いが、仮に結果としてある種の自明性をまとうことになったとしても、その自明性は、実のところ、そうした問い自体の半ば自動化した、反復的な遂行以外の何ものによっても積極的に担保されていないという点、がそれである。ところが、「傅山とは誰か」という問いにまつわる、そのような意味での困難さについては、これまで、ほとんど常に意識されることがなかった、かのようなのである。したがって、「傅山とは誰か」という問いは、問い自体の自明

性をまったく疑われることなく、常に問いかけられてきた、かのようなのであるし、また、そうした問いかけのうちには、それに一対一対応するという意味での、唯一の正しい答えの存在があらかじめ前提されていた、かのようなのである。これは、どういうことなのか。「傳山全書」刊行後の現時点で再度、「傳山とは誰か」という問いの困難さを見積もるためには、当然、この点の解明が鍵となるだろう。そのためにも、まずは、「傳山とは誰か」という問いをめぐって、これまでに繰り広げられてきた、ある特殊な歴史を簡単にたどり直してみる必要がある。

二 「傳山とは誰か」という問いをめぐる歴史

そのときに、ここで最初に問題にされるべきなのは、このようなことであろう。すなわち、「傳山とは誰か」という問いを、これまで、そもそも可能にもし、また、そこに実際に出現させてもきた、特殊な媒体、もしくは、場とは、一体どのようなものだったのかということ、である。換言するなら、「傳山とは誰か」という問いをめぐる、一つの歴史を再構成しようとする際には、そのような歴史を可能にしてきた条件の一部をなすものとしての、そうした問いを伝達するはずの媒体、そうした問いが位置するはずの場が、一体どのようなものであったのか、にまずは注目しなければならないのである。

そして、それについては、ひとまず次のように、その要点を指摘できる。何より、それは、複数の形態をとるものであったこと、したがって、「それ」と言うよりも、むしろ「それら」と言われるべきものであったこと、また、それらの一部は通時的に順次継起したが、他方で、そのほとんどは同時期に併存してもいたこと。具体的に述べるなら、それらは、まず、伝記（の執筆）であり、または、著作（の刊行）であり、あるいは、それらに並行してなされた、見聞や口承（の流通）であり、次いで、年譜（の編纂）であり、最終的には、思想史（の構想）であった、のである。

このように様々な媒体、もしくは、場の活用を通じて、これまで、「傳山とは誰か」という問いは確かに問いかけられて

きたし、また、答えられてもきた。とはいえ、「傳山とは誰か」という問いを生み出す媒体や場がこのように多様であるとしても、そのことは、問い自体の、そして、それに対応する答え自体の多様性まで、必ずしも保証してくれるものではない。むしろ、それとは逆に、そこに明らかに見られるのは、後に示すように、傳山の身元確認(3)をめぐっての単調なパターンそのものである。いくつかの画期によって通時的には色分けされているとはいえ、非常に堅固な、したがって、かなり単調でもある、問いと答えとの結びつきのパターンが、それである。そして、後に見るように、こうしたパターンを個別に列挙していくなら、それらは、おそらく三通りにしかならないのである。

話がいささか錯綜してきたかもしれない。これ以上の錯綜を避けるためにも、「傳山とは誰か」という問いをめぐり、一つの歴史に関して、これまで述べてきたことを、ここで、ひとまず整理してみよう。そして、それは、以下の三項目にまとめられるだろう。(1)「傳山とは誰か」という問いは、多様な媒体や場を支えにして繰り返し問いかけられてきた、(2)その際に、問いの焦点は、傳山の身元確認にもつばら向けられていた、(3)そこに順次現れたのは、問いと答えとがあらかじめ堅固に、不可分に結びついた、わずか三通りのパターンだった。

このようにひとまず整理できるとして、それでは、唯一の答えがその問いによって既に保証されているという意味で、常に堅固でもあり単調でもある、こうした予定調和的な問いと答えとの複合とは、一体どのようなものであったのか。この点が、今度は、具体的に明らかにされなければならない。

それに関して、まずは次の二点を確認しておきたい。すなわち、それらは、「傳山とは誰か」という、形式的には単一の問い、たとえば、その形式を通じて、実際には、複数の問いかけが結果的に遂行されているとしても、形式上はあくまで単一の問いとともに生起するものである以上、当然ながら、単にそれぞれが孤立して存在しているわけではなくて、相互に関連づけられているということであり、しかも、パターンが三通りである以上、相互の関係は一方でかなり単純でもあるということ、である。やや抽象的な言い方で、あらかじめそのことを説明するなら、それらは、まず、傳山の身元に関する

る相異なる認定の対立としてそのうちの二つが清初の時期に前後して現れ、やがて、その両者の対立をいわば止揚するような第三のパターンが近代に至って新たに出現したことによって、「傅山とは誰か」という問いは、それに対応する唯一の正しい答えとともに、一定の枠内にとんと恒常的に囲いこまれることになった、のである。

そもそも、傅山の身元に関する相異なる認定の対立とは、傅山の身元を世俗の外に帰属させるのか、それとも、世俗の内に帰属させるのかという、二者択一式の対立であった。しかも、この対立はまた、同時に、傅山の身元を明朝に帰属させるのか、それとも、清朝に帰属させるのかという対立でもあった。それにもかかわらず、あれかこれかの選択を絶対的に強いるはずのこの対立は、必ずしも先鋭化することなく終わった。というのも、時間的には先行して提起された前者の認定は、後者によって後に圧倒され、その結果、そうした認定を支えていた傅山の伝記的事項、より正確に言うなら、そのように傅山を伝記的に語るために要請された、個々のモチーフもまた、ほとんど後者の内に換骨脱体的に吸収されてしまうことになったからである。そして、そのことによって、「傅山とは誰か」という問いは、一応の安定を得ることになる。次いで、近代に至って、第三のパターン、すなわち、傅山を「思想家」として認定する、思想史の文脈が登場するとともに(4)、その文脈の中に、今やすっかり陳腐化した前二者のパターン、これも、より正確に言うなら、第二のパターンおよびそこに換骨脱体的に吸収されてしまった、かつて第一のパターンを支えていた伝記的な諸モチーフ、は言わば止揚されていくことになる(5)。そして、「傅山とは誰か」という問いはここに再び、しかも、以前にもまして安定し、現在でもなおその線上に、「傅山とは誰か」という問いはほとんど自動的に位置づけられている、と言っていいのである(6)。

三 「傅山とは誰か」という問いの回帰と「傅山全書」

「傅山とは誰か」と問いかけることは、これまで、ほとんど困難ではなかった。結論を先取りするかたちでこのように先に述べていたのは、以上のような意味においてである。だとすれば、これまで、ほとんど繰り返し素通りされてきたと

も言える、「傅山とは誰か」という問いの困難さとは、具体的にはどこに見出しうるものだったのか。この点について、以下に、もう少し検討を加えてみたいと思う。さらに、そうした検討を踏まえて、「傅山全書」の刊行という事態が今新たに要請している、「傅山とは誰か」という問いの困難さの現時点における再見積もりという課題についても、その帰趨について、一応の予測を示すことにしたい。

そもそも、「傅山とは誰か」という問いは、上に見たように、現実の歴史の中では、それが、かなり単純なパターンの継起の内に取りこまれていたことからしても、現在に至るまで、ほとんど常に安定していた、と言っていることは確かである。おそらく、ごく短い間に結果的に解消されてしまったとはいえ、傅山の身元確認をめぐってまもなく発生した清初の対立関係が、わずかに、その例外なのである。だとすれば、そのとき、「傅山とは誰か」と問いかけることも、ほとんど常に困難ではなかったわけである。それはいいとして、ところで、「傅山とは誰か」という問いをめぐってこれまでに形成されてきたこのような状況を十分に理解した上で、あえて、それに対して、次のような姿勢をとるということは考えられないだろうか。すなわち、そうした状況は今や歴史上の事実として既に不動のものであるとしても、あえて現時点においてそれを追認しない、という姿勢である。とはいっても、このような姿勢は、決して過去の歴史をいわば一方的に否定しようとするものでも、断罪しようとするものでもない。たとえば、「傅山とは誰か」という問いをめぐって、これまでに描かれてきた歴史的な軌跡を、現時点において完全に抹消することをあえて目指そうとしているのではない。それは不可能である。また、そうした歴史的な軌跡にあえて対置すべく、過去に仮想的に遡ることによって、そのようではない軌跡をいわば無垢の状態から描き直すようとしているものでもない。それではあまりに楽観的すぎる。そうではなくて、「傅山とは誰か」という問いをめぐる特殊な歴史を、あくまでその特殊性に即して理解しようとするることによって、そうした歴史に対する無条件の追認から何としてでもあえて免れようと、いうのである。

ところで、いささか種明かしめくことになるが、本稿におけるこれまでの記述が実践しようとしてきたことが、まさに、

そのことだったのである。そして、そうした実践から明らかになったのは、今や、「傳山とは誰か」という問いの困難さは、ほとんど知覚しえないものになっている（それは、これまでほとんど常に、困難そうではなかったのだから）、ということであった。しかし、だからといって、「傳山とは誰か」という問いの困難さは、現在においてはもはや知覚しえないものである、と決めつける必要もまたない（それは、やはり、「ほとんど」知覚しえないだけなのだから）。それは、おそらく、その問いをめぐる特殊な歴史の厚みを通じて、かろうじて指示されるしかない、のである。あるいは、その問いをめぐる特殊な歴史の厚みに、今や、その問いは自然に織りこまれていくかのようにあり、そのことによって、それは、きわめて安定しているかのようにあるとしても、そのような歴史の特殊性にあくまで即していくことによって、特殊な歴史の特殊な厚みごしに、その問いの困難さはかろうじて透かし見られるのだ、と断言していいのかもしれない。「傳山とは誰か」という問いの困難さを、たとえば、いまだ歴史の厚みに歪められることのない、無垢な眼差しによって直視するといったことは、ここでは到底望みえないとしても、おそらく、それは、まったく指示できないわけではないし、たとえ、透かし見られるだけであるとしても、まったく見えなわけでもないのである。

だとすれば、こうした状況の中に現れた「傳山全書」の刊行という事件は、「傳山とは誰か」という問いをめぐるこれまでの歴史に、また、その問いをめぐる現在の環境に、一石を投じることになるのだろうか。「傳山全書」が刊行されたことで、何かが変わったのだろうか。

それは、ある意味ではそうであり、また、ある意味ではそうではない。このような曖昧な回答をここに示すしかないのは、次のような理由からである。

まず、私見によれば、「傳山とは誰か」という問いは決して安定したものではないし、また、安定したものともなりえない。なぜなら、一般的に言って、ある任意の人物が一体誰であるのか、と問うその問い自体が、常に困難であると思われるからである（7）。それは、その問いを問いかける場とともに常に浮遊しうるし、また、そのことは、そうした問い自体

を希薄化していくことにもつながるであろう。ところが、それにもかかわらず、自明な何者かとしての傳山が、確かに、これまででも繰り返し述べられてきた。そこでは、「傳山とは誰か」という問いの困難さはほとんど素通りされてきたし、また、それが繰り返し行われたことで、そこに見られるようになったのは、「傳山とは誰か」という問いが、いつでも予定調和的に固定され、また、そのつど極度に様式化されているといった事態であった。こうした事態が含む問題点、すなわち、「傳山とは誰か」について語られれば語られるほど、そうした語りが織りなす歴史の厚みの中に、「傳山とは誰か」という問いはまるですれが自然でもあるかのように埋没してしまおうという(8)問題点を、「傳山全書」の刊行は今まさに提起し、それに対する注意を新たに喚起しつつあるかに思われるのである。

そうは言っても、「傳山全書」の刊行は、別に、「傳山とは誰か」という問いをめぐる現在の特殊な事態を、劇的に一変させるものとしてあるわけではない。むしろ、「傳山全書」の刊行は、あくまで、そこに、先に述べたような問題点を提起し、それに対する注意を新たに喚起しようとしているのである。「傳山とは誰か」という問いが置かれている現状を、今ここに再認識させようとする力がそこには潜んでいて、その力が現れつつある、と言っていいのかもしれない。ただし、それは、「傳山全書」の中に多くの新出資料が含まれているから、そうなのではない。そうではなくて、おそらく、次のようなことがらこそが、「傳山とは誰か」という問いをめぐる状況に対する再認識の要請というかたちで、今ようやく行使されようとしている力、すなわち、「傳山全書」の刊行を来源として今現れつつある力を保証しているのである。

まず、「傳山全書」の中には、傳山の名を冠せられた、または、傳山の名に関わる多くのテキストがかつてないほどに一同に会していること(9)、換言するならば、これまではほとんど分散状態のうちに放置されていた、そうしたテキスト群が、今や、まったく新しい秩序の中に包括的に置かれていること。そのことによって、今や、そこそこが、「傳山とは誰か」という問いにとって、その問いが生起する唯一の場となっている、とまでは言えないにしても、その問いを活性化するための特権的な場となっている、とは言っていないこと。したがってまた、「傳山とは誰か」という問い自体が、改めてそれらの

テキストを読むことを我々に要請し、さらに、そこに「傳山とは誰か」という問いの再構築を要請している、と思われること。

「傳山全書」の刊行とともに、「傳山とは誰か」という問いはこれまでの自明性を一旦喪失して、再び浮遊しだし、希薄化しつつあるかのようなのである。だとすれば、今、「傳山とは誰か」という問いは、それをめぐっての歴史上ほとんど始めて、そうした問いの困難さに自ら直面しようとする機会に遭遇しつつある、と言っているのかもしれない。

四 ねじれの渦中に置かれた「思想家」

もっとも、このように言ったからといって、「傳山全書」の刊行がおそらくもたらすであろう、以上のような変化が、また、その中における「傳山全書」の役割の大きさが、「傳山全書」自身によって自覚されているかと言えば、次に見ていくように、実はそうではない。つまり、そこには、奇妙な、ある種のねじれ、または、反動や逆行が見て取れるのである。このねじれがいかなるものであるかについて、さらに検討を加えてみる必要があるだろう。つまり、「傳山とは誰か」という問いに関して、「傳山全書」の刊行がもたらすであろう、以上のような変化の可能性とはまた別個に、事実上、そこから離反し、ほとんど、それとは齟齬するかたちで、そもそも「傳山全書」は自らの刊行によってどのような傳山像を、新たに、もしくは、新たにではなく再度、構成しようとする、あるいは、構成したと自認していたのか、その点を問題にしたいのである。

それは、何よりもまず、実にあからさまに示されている。なぜなら、「傳山全書」の巻頭に置かれた「前言」の、さらに冒頭の部分にそのことが既に公開されているのだから。そして、「傳山全書」の刊行の経緯を全体として簡潔に述べる、「前言」の冒頭にことさらに記されているのは、「思想家」としての傳山の簡明な肖像である。すなわち、「思想家」としての傳山を構成するだろういくつかの要点を列挙することで、一つの焦点が結ばれた、簡明でありながらもまぎれもない、「思

「思想家」としての傅山の肖像そのものなのである。しかも、そこでは、「思想家」として傅山を規定することにまったくためらいは示されない。「思想家」傅山の存在はあたかも自明の事実でもあるかのように、記述は進められていく。そしてまた、そうした記述が半ば公然とそこにはのめかしているのは、おそらく、このようなことである。「傅山全書」の刊行は、「思想家」傅山の全貌解明へ向けての大きな一歩であり、揺るぎない基礎であること。だから、「思想家」傅山の全貌解明については、今や将来に向けて、その成功が半ば約束されたものと考えていいのであり、当然、そのことに楽観的であるべきこと。

「傅山全書」「前言」の冒頭部で述べられる傅山は、たとえば、このようである。傅山は、「明末清初期の著名な思想家、学者」である、と。しかし、だからといって、彼は「思想家」でもあり、それと等しく「学者」でもあった、とここで述べられているわけではない。あくまで、重心は、ここでは当然のことのように、あらかじめ「思想家」傅山の方に偏っているからである。つまり、彼はむしろ、たまたま同時に「学者」でもあった、「思想家」として位置づけられるのである。確かに、彼は「多方面にわたる学問的成果をあげた稀にみる学者」であった(10)。しかし、それは、たまたまそうでもあったと言うに過ぎない。なぜなら、「前言」の冒頭部の簡潔な記述によるなら、彼は、たまたま一代の碩学でもあった以上に、何よりも、次のような意味において、いわば本質的には「思想家」に他ならなかったからである。そして、多方面にわたる学識も、そのような「思想家」とっては、その知的背景に他ならなかったからである。

「思想家」傅山の肖像を構成しようとする、「傅山全書」「前言」冒頭部の記述(こうした記述としては、ごく簡潔ながらも、要点をまんべんなく、しかも、的確におさえているという意味で、模範的ともいえる)を本稿なりに整理してみるなら、このようになるだろう。

彼は、まず、唐突な王朝の交替によって濃密に彩られる、明末清初期という変革期にあたって、異民族(満州族)の硬軟両様とりまぜた巧みな支配に対し、決して屈することのない、民族意識の持ち主であったこと。また、彼は、世俗から

遙かに超越した、ある種の精神的な境地、高みに到達しえていたこと、それによって、ある種の超越的な眼差しを獲得しえていたこと(11)。さらに、既存の体制と自らをなしくず的に一体化してきた多くの儒者の存在形態に対して、より一般的には、儒者の多くにおいて典型的に見られるような、奴隸的性格に対して、批判的な構えを維持できるだけの、創造的な精神に富んでいたこと。人々の社会的な通念を封建的な枠内に当然のように固定化する、儒教の禁欲主義的な偏向に、中でも、女性に対して一方的に加えられる抑圧に異議を唱えたこと(12)。宋代以降、その形態自体には随時変貌を加えながらも、その理論的な大筋においてはほとんど連綿と反復され、継承されてもきた新儒教(「理学」。特に、ここでは、朱子学派が意識されている。)の枠組みを公然と批判し、かつ、それに対して理論的な反駁を加えたこと。「聖人、悪ヲ為ス」との命題(聖人は善そのものであるとの儒教的な通念に対抗して、あえて、聖人と悪との不可分の結びつきを指摘したという点で画期的な(13))を大胆に提起することで、暴力革命の進歩性を積極的に肯定するとともに、そのことによって、被支配者、被抑圧者の反抗闘争に理論的な根拠を提供したこと。

「思想家」傅山をめぐる、そしてまた、それらが「思想家」傅山を構成するために不可欠の要素であるという点では、「思想家」傅山の中心を貫いてもいる、これらの個々の指摘は、全体として、次のように総括されることになる。

確かに、歴史的な制約により不可避的にもたらされた封建性が、傅山の思想において、一方で見られないわけではない。しかし、それ以上に、ここで強調されるべきなのは、「思想家」傅山の肖像を特徴づけている、上に列挙したような要点、すなわち、時代に遙かに先駆けた、そのいわば民主主義的な傾向性であって、それによって、傅山の思想は、その時代において比類のない異彩を放っているのである、と。

傅山が誰であるのかは、ここでは、それをことさらに問題とするまでもなく、まったく自明であるかのようなのである。「傅山とは誰か」という問いも、ここでは、ほとんど機械的にとりあえず問われ、また、ほとんど問髪を入れない答えによって、完全に充足されてしまっているかのようである。「傅山全書」の刊行は、先にも述べたように、「傅山とは誰か」とい

う問いをめぐる、このような光景、ほとんど自然と化した光景を改めて動揺させるべきものだったはずである。しかし、その巻頭に付された「前言」は、その冒頭部で既に、「傳山とは誰か」という問いの再活性化をめぐって、すなわち、この問いの困難さを引き受けるところから始まるはずの、問い自体の再度の活性化をめぐって「傳山全書」に期待される、一種の特権的な役割を、自ら放棄し、あるいは、自ら裏切り、何より、自らそれを直視することすら断念しているかのようなのである。

こうした奇妙なねじれの存在がここに示唆しているものは、おそらく単純である。すなわち、「傳山全書」の刊行という事件は、「傳山とは誰か」という問いの再活性化へ向けて、確かに、微かな希望を開くものであるとはいえ、しかし、それはそうした可能性の成就に対して、何ら樂觀を許すものではなかった、ということである。だとすれば、「傳山とは誰か」という問いをめぐるこれまでの膠着した状況を脱して、ひとまず、そうした問いが本来おそらく置かれているはずの不安定な局面へと到達し、そこから再度「傳山とは誰か」と問い直すためには、その前に、「傳山全書」内部における（しかも、それが、「前言」の冒頭部でなされているという意味では、その始めのさらにまた始めにおける）ねじれ、裏切りを、一つの関門として乗り越えるところから、おそらく始めるしかないのである。「傳山とは誰か」という問いの困難さを引き受けることは、したがって、今なお容易ではない。

「傳山とは誰か」と、これまでとは別様に問い、しかも、その問いを、これまでとは別様に、すなわち、仮にそうすることが可能であるとして、その困難さを何ら回避することなく全面的に引き受けるためには、現時点では、さらなる「傳山論序説」がその前段において、なお必要なのかもしれない。「傳山とは誰か」と問うことは、おそらく、今なお容易すぎるのである。

注

(1) こうした問いは、常に次のような二つの問いを随伴している、あるいは、既に次のような二つの問いを不可避的に内包している、のではないだろうか。

すなわち、そのような問いはそもそも一体どこに位置しているのか（ある人物が誰であるか、と問うのは一体誰なのか）、という問いであり、また、そのような問いは自らの問いかけをどのようにして正当化しうるのか（誰がほかの誰かを、一体誰であるのか、と問いうるのか）、という問いである。これら二つの問いが常にそれに随伴していること、あるいは、これら二つの問いが既にそこに内包されていることからして、ある人物が誰であるか、と問う第一の問いは、常に困難であり続けるし、仮に、それがある種の自明性をまとうことになるとしても、そのときには、そのような自明性を保持することの困難さに常にさらされ続けることになる、と断言していいだろう。

以上のような意味において、ある人物が誰であるか、という問いは、おそらく常に困難であり続けるしかない、のではないだろうか。

(2) 「傳山全書」全七冊は一九九一年十二月にその第一版が山西人民出版社より刊行された。発行部数はわずか千五百部である。もっとも、この部数も、傳山とほぼ同じ頃（日本で、明末清初期と通称される時期）に活躍した黄宗羲や王夫之の、近年刊行された、または、現在なお刊行中の個人全集の発行部数と比較してみるなら、必ずしもきわめて少ない数ではない。

ちなみに、「黄宗羲全集」と「船山全書」は、それぞれ、浙江人民出版社、湖南人民出版社より、「黄宗羲全集」全十二冊は一九八五年より一九九四年にかけて順次刊行され、「船山全書」全十六冊は一九八八年に刊行が開始され、現在なお第十三巻以降が未刊のままである。この両者とも、従来に見られない精度での厳密なテキスト・クリティックを経てそれぞれ刊行されているという点からして画期的な全集である。ところで、黄宗羲や王夫之の場合と比べて、そもそも傳山の場合には、残された関係文献の量が相対的に少なかつたとは言え、両全集とは異なって、「傳山全書」は

全巻が一挙に刊行されたというあたりに、編集者および出版社の特別の意欲がうかがえるようである。

ところでまた、現時点において、「思想家」としての三者の知名度には顕著な違いがあると言っている。明末清初期の大「思想家」として広く認知されている、黄宗羲や王夫之に比べるなら、国内外を通じて、「思想家」傅山への評価は大きく見劣りするだろうからである。それにもかかわらず、そのような知名度の違いが発行部数に必ずしも反映されていないのは、広く学術書の出版をとりまく厳しい環境によるものなのであろう。こうした高価で大部な全集の場合、その発行部数を決定する際には、当然、国内だけではなく、海外、特に日本での販路なども十分に意識されていると思われるが、その際には、「思想家」としての三者の扱いをほぼひとしなみにするのが、現在の出版業界としては相応の待遇ということなのであろう。

(3) ここで言う「身元確認」とは、傅山を認知しようとする際の、次のような姿勢を指したものである。

彼の生涯を通じての様々な行動や思索は、彼の生きた時代の激動に比例してきわめて多様である。そして、そのような多様性の広がりの中には、仮に、個々の行動や思索に任意に基づいて傅山への認知がなされたとした場合には、そうした認知が、互いに離反し、齟齬していく可能性すら秘められているかもしれない。それにもかかわらず、それらをすべて彼の本質の顕現と見なしてしまうことで、逆に言うなら、彼の行動や思索の多様性をすべて単一の本質の内面に強制的に還元することが可能であると見なしてしまうことで、そうした行動や思索の背後にあるはずの本質の発見を目指し、さらに、それを通じて、彼の身元を最終的に確認することができると思なす姿勢、である。

彼が医師、書家、画家としての一面を有し、生前死後を通じて、それぞれの方面では一定の名声を博していたこととの関連で言うなら、このような意味での「身元確認」は、単にそうした専門的な技能に限定されることなく、彼の本質の発見を目指して、全人的な把握を志向する、と言ってもいいだろう。

(4) 思想史の文脈の新たな登場がそこに開いた可能性とは、おそらく次のようなものであった。

たとえば、傅山のように、思想的な影響力という点ではかなりマイナーな（とりわけ、後代に対しては）「思想家」であっても、その人物を「思想家」として位置づけるために必要とされる文脈が、思想史の中に一旦発見されるならば、それがいかに任意のものであろうとも、彼は、一人の「思想家」として思想史上に確固たる位置を占めるようになるだろうということ。その意味で、かつて、前二者のパターン間の硬直した対立が、選択肢をわずか二つに制限していたことに対比するならば、それとは比較にならないほど自由自在な身元確認の可能性が、そこに新たに開けてくるだろうということ。

(5) 思想史の文脈、あるいは、思想史という文脈においては、こういった、本来ならば相対立するはずのパターンも含めて、傅山に関わることすべてが、有効に活用されることになるだろう。すなわち、「思想家」としての傅山を生み出すために参照すべき、あるいは、「思想家」としての傅山を思想史上に位置づけている特殊な文脈を発見するために検索すべき、一種の事項索引としてである。

(6) 「傅山とは誰か」という問いをめぐる、以上のような特殊な歴史的経緯の詳細については、拙稿「傅山のために——傅山論序説」（『中国哲学研究』創刊号、東京大学中国哲学研究会、一九九〇年）を参照されたい。

付言するなら、以上に示された、「傅山とは誰か」という問いをめぐる、特殊な歴史についての概説は、結果として、前稿に対する一種の注解ともなっている。そして、本稿では、「傅山全書」の刊行という新たな状況を踏まえた上で、前稿をさらに補足すること、が目指されている。

(7) その理由については、注(1)で既に述べた。

(8) ここでは、問いが固定され、様式化されることによって、一方では、問いが凝縮され、安定化し、また、そのことによって、問いの流通が効率的に編成されながら、他方では、それがあまりに自明であるために、「傅山とは誰か」という問いが随伴し、内包しているはずの、そうした問い自体に対する二つの問いかけは既になしくずしに解消されて

いる、と言っている。

(9) もっとも、より正確に言うなら、彼の名を冠せられた、または、彼の名に関わるテキストが一同に会したことは、これまで、ただの一度もなかった。たとえば、そうしたテキストの一部を構成するはずの戯曲なり、医学関係の著作が、いわゆる「詩文」(ある著者の著作を集成し、分類するためのジャンルとしては、より伝統的であり、かつ正統的でもあることで、規範的でもあった)と同じくくりの中に集成され、さらに、同じ平面の上に分類される、といったことはかつて起こらなかったのである。

(10) ここで具体的に列挙されているのは、「経、史、諸子、道教、仏教、詩文、書法、絵画、音韻、訓詁、金石、考拠、雑劇、医学等」の分野である。

(11) 顧炎武が、傅山を形容した、「蕭然物外、自得天機」(「広師」『亭林文集』巻六)との一節(「まったく世俗の外にあって、天と一体化している」というほどの意味である)が、ここに引用されている。

先にも述べたように、思想史の文脈の中に、「思想家」傅山が安定的に位置づけられる以前の一時期に見られたのは、傅山の身元に関する、相異なる認定の対立であった。それは、傅山の身元を世俗の外に帰属させるのか、それとも、世俗の内に帰属させるのかという対立であり、同時に、傅山の身元を明朝に帰属させるのか、それとも、清朝に帰属させるのかという対立でもあった。顧炎武のこの一節は、同時代の中に、前者の立場を表明したものであり、それは、後に、後者の認定を決定的に優位づける上で大きな役割を果たした、全祖望の「陽曲傅先生事略」においては、傅山の全貌、その本質を矮小化するものとして、ほとんど否定的にのみ引用されることになる。この間の経緯については、前掲拙稿(第四章)にやや詳しく取り上げられている。

(12) この点については、村田和弘「傅山の戯曲」(内山知也監修、明清文人研究会編『傅山』(芸術新聞社、一九九四)所収)、磯部祐子「戯曲家傅山」(『傅山集』「中国法書ガイド」五十五(二)女社、一九九〇)所収)に詳しい。

(13) 一九八〇年代半ばに始めて公にされた(「中国哲学」第十三輯、人民出版社、一九八五)、從來未発表の佚文、「聖人為悪篇」で提起されている命題である。

「聖人為悪篇」では、聖人は、非常時における強力なる救済者として想定される。そのような聖人は、世界の救済のために、自ら積極的に「悪」(「無理」)を遂行し、既成の秩序(「理」)を徹底的に破壊する(「無理勝理」)。しかも、その「悪」とは、「殺ス」こと(殺人)である(この点の公言もまた、「生」を積極的な価値として肯定する、儒教的な通念に大きく離反しているという意味で、画期的である)。そして、聖人による「悪」||「殺ス」ことの遂行によって、結果的には、より高次の「善」(名もない庶民たち(「市井賤夫」)によって、既に無意識のうちに、日々生きられているはずの)が達成され、それは新たな世界秩序として現れる(「無理生理」。易姓革命がその端的な例である)。「聖人為悪篇」の前半で、議論はこのように展開していく。

以上の議論の中で、「聖人、悪ヲ為ス」と一対をなす「無理、理ニ勝ツ」の命題は、結局、「無理、理ヲ生ム」に最終的に転換され、そして、そこに完全なる善の体現者としての聖人像が、いわば迂回の末に回復されることになる。したがって、「聖人、悪ヲ為ス」との命題が当初与える過激さの印象も、ここに至ると急速に収束していくことになる。それにしても、聖人と悪とをまず不可分の関係に置き、さらに、聖人をまさに聖人たらしめる行動が、何より、殺人として現れる、と述べたことの先鋭さは消え去らない。